

ミュンヘン留学体験記

Ludwig-Maximilians-Universität München

村上 正憲

(東京医科歯科大学糖尿病・内分泌・代謝内科)

2017年2月より、ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン（ドイツ）の内分泌学研究室に留学中の村上正憲と申します。本研究室は副腎を中心とした内分泌腫瘍の研究を行っており、ヨーロッパを中心に希少副腎疾患の臨床データ、腫瘍サンプルの収集を行うENSAT（the European Network for the Study of Adrenal Tumors）というコンソーシアムの運営に中心的な役割を果たしています。副腎皮質癌や褐色細胞腫といった希少疾患について、ヨーロッパ中のネットワークを駆使して数百単位の検体数で研究を進めることができる環境は、極めて素晴らしいものだと感じており、今回の留学の醍醐味の一つです。

私のボスである Prof. Dr. med. Beuschlein はスイスのチューリッヒ大学病院の教授も兼任しており、日常的にスイス・ドイツ間を行き来しています。また研究室のメンバーもギリシャ、スペイン、イタリア、ブラジル、中国と国際色豊かであり、研究室内のグループによってはスペイン語を中心に会話を進めているようなところもあります。Bavaria 地方特有の風土を保ちつつ、グローバリズムも受け入れるところがミュンヘンの懐の深さであり、魅力であると感じているのですが、研究室にもそのような雰囲気を感じ取ることが出来ます。

不安も多い初めての海外生活でしたが、ミュンヘンは生活しやすく快適な街です。電車、バス、トラムといった交通網がきめ細かく整備されており、慣れてしまえば市内の移動は便利です。現地の方々も英語を話せる割合が高いので、私のようなドイツ語初学者でも問題なく生活することが出来ます。駐在の日本人の方々も多く住まわれており、週末は日本人の仲間と天然芝が広がる公園でサッカーをして気分転換をはかっています。またミュンヘンと言えばサッカーが有名ですが、近年のブンデスリーガ1部経験がある主要チームが市内に3つ（FC バイエرن、1860ミュンヘン、SpVgg ウンターハヒンク）もあり、観戦の楽しみにも事欠きません。住むにあたって難点を挙げるとすれば、家賃の高さでしょう。ドイツ国内のなかでもミュンヘンの人気は高く、地価はバブル状態のようです。この街の魅力の裏返しと言えます。

日本では、専門分野での臨床経験を持った上で研究に臨むような、臨床と研究の橋渡しが可能で、可能な人材の不足が指摘されています。留学する上で、ドイツではどのような状況だろうという興味があったのですが、少なくとも私の所属する内分泌学研究室では医師としてのバッ

クグラウンドがある上で研究を行っている方は少数派であり、決して多くありません。この意味で、言葉の壁がある日本人であっても留学先で医学研究に大いに貢献できる点があるのではないかと考えています。残りの留学期間でしっかり成果を挙げられるよう、努力して参りたいと存じます。

最後にこのような貴重な機会を与えてくださった東京医科歯科大学糖尿病・内分泌・代謝内科の皆様方、そしてご支援をいただきました上原記念生命科学財団の皆様に心より感謝申し上げます。

(30. 4. 27受領)